LAMPIRAN

午前零間　から朝五時半まで延々と休みなく、ベルトコンベアで運ばれる弁とを作りつずけなければならない。パートにして高い時給だが、立ちつめのきつい作業だ。

（Kirino Natsuo.1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 8）

四角く固まった白飯を一瞬のうちに平たくするには、手首と指の緑が要って、さらに中腕でその作業を続けるために腰まで痛みだすのだ。一時間もやれば背中から上腕まで痛みが走り、しばらくは腕も上がらなくなるだから、

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 21）

夜勤をしていて気が滅入るのはこという瞬間だった。このことが原因でノイローゼになったパート仲間がいたが、よくわかる。すぐ暗くなるから憂鬱になるのではなく、人々の頁っ当な活動から外れているという後ろめたさを感じるせいだ。

（Kirino Natsuo.1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 113 下）

この小さな家は自分にいろんなことを強いてきた。隅々まで掃き清めること、猫の額ほどの庭の草をむしること、煙草の臭いを消すこと、そして多額ローンを返済すること。ナノに、雅子はここに自分の居場所だとはどうして思えないのだった.

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 127）

けたたましい音をたてるコーヒーメーカーにコーヒー豆を流しは入れた。いつも通りトーストとズクランブルエッグの朝食を準備するつもりだった…

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 130）

”ええ、六時前に帰って来て，それから朝食の準備をして家族と一緒に食べました。みんなが出て行ってから洗濯したり掃除したりして、九時過ぎに寝みましたが。普段と変わりません”

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 380）

だが、良樹は自分の事件の時に、父親が何尾助けもしてくれなかったと恨んでいるのだ。何のために一緒に生活しているのかわからないほど、三人とも行き違っていた。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 132）

“夫は一人で生きていくって。会社から隠居するみたいに。それがあの人のやり方なのよ。誰も入ることができないの。息子は大きいから、もう大丈夫”

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 291 下）

”だって、まず生活が反対になりますよね。家族と擦れ違いなってコミュニケーションが成り立たない。あと、夜勤に行くと言っても本当に何をしてるのかわからない、ということもあるでしょう。それなら普通の昼間の勤めのほうがいいに決まってますよ“

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 120）

寝室を別にするようになったのは、この家に引っ越す前、雅子がまだ会社に勤めている頃からだった。それが不自然だとも寂しいとも思わなくなり、今や家族三人がそれぞれの部屋で寝る生活に慣れている。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 96 ）

男や女ではなく、父親母親ではなく、会社に出勤したり家事をしたり、やらねばならない仕事を忠実にこなしているだってなのだった、自分たちはゆっくりと毀れてきているのだと雅子は思う。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 286）

中学しか出ていない自分は、美紀にせめて短大くらいは行かせたいと思っていたが、このままでは不可能だし、老後の貯えなど夢のまた夢である。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 44）

ヨシエはこのところ休みなしで動していた。一日でも多く日当が欲しいからだった。主任は侮蔑するように言葉を投げつける。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 53）

狭い間口の三和土を上がると、すぐ三畳の畳敷きの部屋がある。古ばけた卓袱台や矢茶簞笥、テレビなどが所狭し戸置かれ、足の踏み場もなかった。ここがヨシエと娘、美紀との食事をしたりテレビを見たりする居間となっていた。玄関の前なので来客には丸見えだし、冬は隙間風が入って寒くてたまらない。美紀はみっともない、と文句を言うが、この狭い家ではどうしようもなかった。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 42）

”お金がくれないかな。。”
”幾らくらい”

”八万三千円。美紀の修学旅行の費用なんだけどね。うち、金がすっからかんなの”

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 54）

しかし、結婚ととも弥生の姫様気分はすぐに潰えた。健司は弥生を放って、飲んだり、博打をしたりで家に寄りつかなくなった。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 85）

“知ったことじゃないわ。だって、うちに一銭も入れてないじゃない”. 背中を見せたまま言ったいもかわらず、健司が薄く笑ったのがわかった。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 87）

“本当に?どうして。給料は入れてないのにどうして“
“博打。バカラってやつ”
“嘘でしょう”呆れてそれしか言えなかった。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 87）

その夫と、朝、くだびれて帰ってから繰り返す際限ない口喧嘩。互いに交わされる冷たい刺すような視線。本当に疲れた。弥生は大きな溜息をつきながら、

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 69）

突然、鳩尾に何か堅く重い物が捩じ込まれた。気を失いそうなほどの激痛が襲い、弥生はその場に倒れた。息が吸えなくなって悶絶しながらも、いったい何が起きたのか訳がわからない。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 88）

その途端、ぶつっと音がして弥生の忍耐の糸が切れた。弥生は自分では思いがけない素早さで革のベルトを腰から外し、健司の首に巻きつけた。

（Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 91）

信金中が熱に浮かされたように融資に走り、客と見れば碌な審査もせずに金を貸した時期だ。雅子が危ういと思った客にまで貸し、バブルが崩壊するとそれは不良債権の山となった。地価が低迷しているために担保価値が上がり、競売物件ばかり増えていく。しかし競売自体が追いつかないため不良債権を回収できない。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 293）

十文字が信金に出入りして、バブルが弾けて、ぽつぽと不債権化が始まった頃だ。逃げまわっている客を厳しく追い込むために、信金も十文字のような男を使っていたのだ。好景気の時儲けに走って鷹揚に金を貸し、自分の尻に火がつくと体裁を構わなくなる。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 294)

街の金融業者、通称街金からだった。自動車ローンのほかに、クレジットカードのローンが大きく膨らんで、邦子は数年、その支払いに追われている。元金は減らず、利子だけを払っている状態だということに気付いたのは去年のことだ。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 150)

“あの、すみませんけど、お金を貸してもらえませんか。昨日、支払日でうっかりしちゃったんですけど、今、うち一銭もないんです”

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 157)

"死体処理の仕事しませんかね?"十文字は身を乗り出て声をめた。
“内緒で始末したい死体って結構出るらしいんですよ。それの処理”

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 47 下)

“それってそんなに金になりそうな仕事な訳？”雅子が遮ると、十文字は力を得て頷いた.
“そりゃ、せこい金貸しやるよっかましですよ”

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 49 下)

“違う。仕事になりそうなの。師匠は詳知る必要はないよ。あたしに任せて。ただ、そういう仕事が来たら手伝ってくれるかどうかを知りたいだけ。お金は払う“
“どのくらいなの。あたしは喉から手が出るほど金が欲しいの。あんたとなら地獄まで行くよ“声は震えているが、その底には好奇心が見え隠れしていた。

(Kirino Natsuo. 1998. *OUT*. Tokyo: Kodansha Bunko, Ltd.hal 67 下)

RIWAYAT HIDUP PENULIS

Nama	:	Marike Supardi
Jenis Kelamin	:	Wanita
Alamat	:	Jl. Sukakarya IV no.15A Bandung
Tempat/ Tanggal Lahir	:	Bandung/ 23 Maret 1988
Latar Belakang Pendidikan	:	
2005 – 2009	:	Menempuh Pendidikan di Universitas Kristen Maranatha Bandung
2002 – 2005	:	Menempuh Pendidikan di SMU Putra Nirmala Cirebon
1999 – 2002	:	Menempuh Pendidikan di SLTP Santo Thomas Ciledug
1993 – 1999	:	Menempuh Pendidikan di SD Negeri I Losari